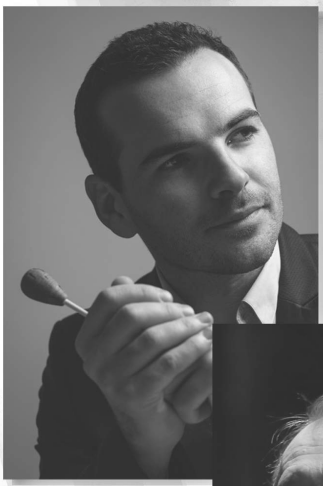
「夢の共演」

新星 ブランギエ
巨匠 プレトニョフ
俊英 アブドゥライモフ
with 東京フィルハーモニー交響楽団



©Simon Pauly

指　揮：リオネル・ブランギエ
ピアノ：ミハイル・プレトニョフ（12/1）
　　ベフゾド・アブドゥライモフ（12/4）

2024年12月1日（日）午後7時開演
12月4日（水）午後7時開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00 p.m., Sunday, December 1,2024
7:00 p.m., Wednesday, December 4, 2024
at Tokyo Opera City Concert Hall

©Evgeny Eutykhov

主催：ジャパン・アーツ
協力：KAWAI／東京フィルハーモニー交響楽団

Program

12.1 日 19:00
7:00 p.m., Sunday, December 1, 2024 at Tokyo Opera City Concert Hall

A.ショール／ M.プレトニョフ：ピアノと管弦楽のための組曲 第2番
（ピアノ：ミハイル・プレトニョフ）

Alexey Shor / Mikhail Pletnev: Suite for Piano and Orchestra No.2
(Piano: Mikhail Pletnev)

M.ムソルグスキー（M.ラヴェル編）：組曲「展覧会の絵」

Modest Mussorgsky (arr. Maurice Ravel): Picture at an Exhibition

12.4 水 19:00
7:00 p.m., Wednesday, December 4, 2024 at Tokyo Opera City Concert Hall

C.ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

Claude Debussy: Prelude to the Afternoon of a Faun

A.ショール：ピアノ協奏曲 第1番　（ピアノ：ベフゾド・アブドゥライモフ）

Alexey Shor: Piano Concerto No.1　(Piano: Behzod Abduraimov)

S.ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲
（ピアノ：ベフゾド・アブドゥライモフ）

Sergei Rachmaninov: Rhapsody on a Theme of Paganini Op.43
(Piano: Behzod Abduraimov)

M.ラヴェル：ダフニスとクロエ 第2組曲

Maurice Ravel: Daphnis and Chloe 2nd Suite

リオネル・ブランギエ（指揮）

Lionel Bringuier, Conductor

©Simon Pauly

1986年、フランスのニース生まれ。パリ音楽院でチェロと指揮を学び、2005年にブザンソン国際指揮者コンクールで優勝した後、フランスのブルターニュ管弦楽団のアソシエイト指揮者、ロサンゼルス・フィルのアシスタント指揮者とレジデント指揮者を務め、その後スペインのバリャドリッドにあるカスティーリャ・イ・レオン響の首席指揮者に就任した。2014年には28歳の若さでチューリッヒ・トーンハレ管の音楽監督兼首席指揮者に就任し注目を浴びた。現在はニース・フィルハーモニー管弦楽団のアーティスト・アソシエート。2025年9月にベルギー王立リエージュ・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督に就任する。客演指揮者として、23/24シーズンはリエージュ・フィル、ドレスデン・フィル、アントワープ響、サンディエゴ響、BBCウェールズ響などに客演する。アメリカでの活動も広げており、これまでにロサンゼルス・フィル、クリーヴランド、フィラデルフィア、サンフランシスコ交響楽団、そしてニューヨーク・フィルなどとの共演を重ねている。

ミハイル・プレトニョフ（ピアノ）【12/1出演】

Mikhail Pletnev, Piano

ピアニスト、指揮者、作曲家として溢れる才能で、世界中の聴衆を魅了している真の芸術家。1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。1978年、21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダルおよび第1位を受賞し、国際的な脚光を浴びる。驚くべき技巧と美しい音色、深い知性に裏づけられた独創的な演奏で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。シュターツカペレ・ドレスデン、ロイヤル・コンセルトヘボウ管ほか世界中のオーケストラを指揮。ボリショイ・オペラでの『スペードの女王』指揮で大成功を収めたほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。1990年ロシア内外の個人、団体より資金を得、ロシア史上初めて国家から独立したオーケストラとしてロシア・ナショナル管弦楽団（RNO）を設立、世界中でツアーを行い、数々の名録音をリリース。2003年7月に初めて東京フィルに客演、以来定期的に招かれ、2015年4月より特別客演指揮者に就任。2022年には新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団（RIO）を創設した。

ベフゾド・アブドゥライモフ（ピアノ）【12/4出演】

Behzod Abduraimov, Piano

©Evgeny Eutykhov

1990年、ウズベキスタンのタシケント生まれ。これまでに、ヴァシリー・ペトレンコ、フルシャ、ドゥダメル、ビシュコフ、ノセダらの指揮のもと、フィルハーモニア管 、ロサンゼルス・フィル、ベルリン放響、ベルリン・ドイツ響、サンフランシスコ交 、クリーヴランド管、パリ管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、チェコ・フィル、サンタチェチェーリア管、ウィーン響、スウェーデン放響など世界的に著名なオーケストラと共演。リサイタルでは、カーネギーホールやロンドンのクイーン・エリザベスホールなど、世界の名だたるホールにたびたび出演。音楽祭にも定期的に招かれ、アスペン音楽祭やヴェルビエ、ルツェルン、ラ・ロック・ダンテロンなどの著名な音楽祭に登場している。ウスペンスキー記念アカデミーでタマラ・ポポヴィチ、アメリカ・ミズーリ州のパーク大学にて、スタニスラフ・ユデニチに師事。2009年にロンドン国際ピアノコンクールで優勝して注目を集めた。

東京フィルハーモニー交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra

© 上野隆文

1911年創立、日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。自主公演の他、新国立劇場他でのオペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏で高水準の演奏活動を展開。海外公演も積極的に行い、高い注目を集める。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千葉市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。　オフィシャルウェブサイト　https://www.tpo.or.jp/

PROGRAM NOTES

鈴木 淳史（音楽評論家）
Atsufumi Suzuki

新星ブランギエ、巨匠プレトニョフ、俊英アブドゥライモフが揃う二夜の演奏会のテーマは、フランスとロシアの邂逅だ。

ラヴェル編曲によるムソルグスキーの《展覧会の絵》は、その象徴たる作品といえる。ドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」とラヴェルの《ダフニスとクロエ》第2組曲は、フランス近代を代表する管弦楽作品。そこにラフマニノフの《パガニーニの主題による狂詩曲》が加わる。

2つのプログラムで作品が演奏される作曲家アレクセイ・ショールは、ウクライナ生まれでアメリカに移住した。数学者、ヘッジファンドの辣腕社員を経て、40代で突然音楽の世界へ飛び込んだという異色の経歴の持ち主だ。プレトニョフをはじめ、有名演奏家との親交も深く、彼らとのコラボレーションでも多くの曲を書いた。シンプルながら、ロマンティシズムあふれる作風が特徴だ。

ショールとプレトニョフの合作である、ピアノと管弦楽のための組曲第2番では、プレトニョフの極上のピアニズムが存分に味わえよう。そして、ショールのピアノ協奏曲第1番では、アブドゥライモフが起伏に富んだドラマティックなピアノを聴かせてくれるはずだ。

東フィルとは初共演となるブランギエは、洗練された色彩感覚の持つ指揮者。28歳のときチューリッヒ・トーンハレ管の首席指揮者に就き、ラヴェルの管弦楽曲全集をドイツ・グラモフォンからリリースして大きな話題を呼んだ。華麗な色彩に満ちたロシアとフランス、そしてショールの音楽を堪能したい。

ショール／プレトニョフ：ピアノと管弦楽のための組曲 第2番（※）

アレクセイ・ショールの『ピアノと管弦楽のための組曲 第2番』は2019年に作曲されたが、その背景には長い歴史がある。彼の子供時代の本棚がインスピレーションの源となり、児童文学から影響を受けた。ショールは作品を通じて音楽的肖像画を提供し、それぞれが異なる本のキャラクターに焦点を当てている。例えば、シンデレラ、ドン・キホーテ、トム・ソーヤー、クァジモド（『ノートルダムのせむし男』）、ハートの女王（『不思議の国のアリス』）、ダルタニアン（『三銃士』）、マチウシ1世、ロミオとジュリエットなどの登場人物が描かれている。この作品は、異なる文学作品からのキャラクターを通じて一種の本棚として、聴き手にさまざまな物語のエッセンスを届ける。

ムソルグスキー：組曲《展覧会の絵》（ラヴェル編曲管弦楽版）

1874年、ロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）は、友人で画家であったヴィクトル・ハルトマンの遺作展を訪れる。その展覧会から受けた印象から作曲したのが、ピアノのための組曲《展覧会の絵》だった。自らの心象を表わすプロムナードを差し挟みつつ、10点の絵画作品から受けた印象をワイルドな筆致で表情豊かに描いたのだ。

このピアノ独奏による組曲は、作曲家の生前には演奏されることなく、作曲家没後にリムスキー＝コルサコフの改訂によって1886年に出版。その5年後にミハイル・トゥシュマロフによる最初の管弦楽版が書かれている。

1922年、モーリス・ラヴェルは、ボストン交響楽団の指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーの依頼によって、このピアノ作品に華麗なオーケストレーションを施した。19世紀のロシア音楽と20世紀のフランス音楽のコラボレーションともいえる。その趣向に富み、とりわけ色彩があふれる編曲によって、この作品は近代を代表する管弦楽作品になった。

独奏トランペットと金管合奏で始まるプロムナード(変ロ長調)。第1曲「グノーム」は、小人が歩く不気味な音楽。プロムナード(変イ長調)を経て、第2曲「古城」は、吟遊詩人による悲しくひなびた歌。

再び登場するプロムナード(ロ長調)に続き、第3曲「テュイルリーの庭」は、宮殿の庭で遊んだ後の子供たちの口喧嘩を表す。第4曲「ビドロ」は家畜の牛の意味だが、強いられた労働に苦しむ人々を表した音楽ともいわれる。

4度目のプロムナード(ニ短調)を挿み、第5曲「卵の殻を付けた雛の踊り」は、バレエの衣装を描いた絵画に基づく、飛び跳ねるような音楽だ。第6曲「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」では、金持ちと貧乏人の二人のユダヤ人を対照的に描く。

最後のプロムナード(変ロ長調)を経て、第7曲「リモージュの市場」では市場での賑やかさが活写され、第8曲「カタコンブ」はローマ時代の地下墓地で、金管による荘厳ながら威圧的な音楽が展開される。

続く「死せる言葉による死者への呼びかけ」は、プロムナード主題の変奏(ロ短調)。第9曲「鶏の足の上に建つ小屋」(バーバ・ヤガー)は奇っ怪な魔女が主役のグロテスクな音楽だ。第10曲「キエフ(キーウ)の大門」では、壮麗かつ巨大な門がそびえ立ち、壮大に曲を締めくくる。

ドビュッシー:牧神の午後への前奏曲

「印象派の作曲家」と説明されがちなクロード・ドビュッシー(1862-1918)。しかし、作曲家自身は、自らの作品が印象派にカテゴライズされることを拒んだという。彼は、印象派よりもルドンやモローといった象徴派の絵画を好み、象徴派の詩人たちと深い交流があった。

《牧神の午後への前奏曲》は、その象徴派を代表する詩人マラルメの詩にもとづく。牧神=半獣神とは、意識と無意識が混在した存在。それらの境界線上に起こる情緒がこの詩のテーマだ。太陽の下でのエロティックな幻想、あるいは混濁した意識の中で繰り広げられる生命力の讃美。奔放かつ緻密な和声法を駆使し、色彩的で感覚的な美しさを前面に出し、すべてが夢かうつつかわからないという音楽をドビュッシーは作り出した。

冒頭、フルート独奏が主題を提示する。半音階進行を交えた、牧歌風の旋律である。続いて、まるで水を表現しているかのような2台のハープによるグリッサンド、そして柔らかに響くホルン。

この主部の後、異なる和声に支えられた10の部分からなる変奏によって、この曲は構成されている。ただし、中間の部分を展開部と見なせば、自由なソナタ形式にもなりうる。形式上でも、この作品は「半獣神」なのだ。

ショール:ピアノ協奏曲第1番(※)

アレクセイ・ショールは、ピアノ協奏曲第1番を作曲する前に、すでにピアノと管弦楽のための作品をいくつか手がけている。この協奏曲では、テーマ展開を深く掘り下げ、より複雑な和声と旋律の言語を探求している。ショールはこの曲で、新たな方向性として幅広いダイナミックな表現やテクスチュアの探求を行っている。彼は特定の物語を提示するのではなく、人生のさまざまな段階や感情の風景を、音楽を通じて表現している。ピアノとオーケストラの関係が、人間の感情の旅を映し出し、テーマの展開を通じて連続性を持たせ、多様性も確保している。特に、第1楽章の第1主題は賛歌のように繰り返され、様々な変奏を通じて広がり、進化する。このアプローチにより、聴衆をその音楽的物語に深く引き込む。

ラフマニノフ:パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

ロシア革命のため祖国に帰ることを断念、1918年からアメリカに留まって活動を続けることになったセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)。新世界ではピアニストとしての仕事が強く求められ、落ち着いて作曲できる時間が限られたため、作品数は減少した。

そのなかでも、いくつかの重要な作品が生まれている。スイスの別荘で1934年の夏に書き上げられた、このピアノと管弦楽による《パガニーニの主題による狂詩曲》もその一つ。

短い序奏、主題と24曲の変奏曲から構成。ただし、序奏と第1変奏、主題という変則的な順番で、その後に残りの変奏曲が切れ目なく演奏される。

主題は、ヴァイオリンの鬼才パガニーニの《無伴奏ヴァイオリンのための24のカプリース》の最終曲。作曲者はこの主題を変奏していくだけではなく、それぞれの変奏を表情豊かな独立した曲として作り上げる。その目まぐるしさは、狂詩曲という名にもふさわしく、気分が次々に変化していくよう。

随所にピアノの超絶技巧が散りばめられている。第7変奏や第10変奏では、この作曲家のトレードマークの一つ、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」の引用も。第18変奏はもっともよく知られた曲で、甘美な旋律が情感豊かに奏でられる。

ラヴェル:《ダフニスとクロエ》第2組曲

1909年、セルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュス(ロシア・バレエ団)はパリで公演を行い、大きな成功を収めた。辣腕興行師であったディアギレフは、さらに注目を集めるため、話題の作曲家に新作を書いてもらうことを考えた。

モーリス・ラヴェル(1875-1937)もその白羽の矢があたった一人だった。フランスの作曲家に委ねられたのは、3世紀頃に活躍したギリシャの作家ロンゴスが書いた田園ロマンスだった。この物語で描かれるのは、山羊飼いの少年ダフニスと羊飼いの少女クロエの幼なじみの2人が、恋敵の出現や海賊との争いなどを経て、最後は結ばれるというもの。

ラヴェルは、古代趣味にこだわることなく、音楽による巨大なフレスコ画として、1912年にバレエ《ダフニスとクロエ》を完成させた。のちに作曲家は、この1幕3場からなる大作から2つの組曲を作りだす。第2組曲は、バレエ原曲の第3場の音楽の大半が使用され、「夜明け」「パントマイム」「全員の踊り」の3つの音楽によって構成される。

「夜明け」は、小川がせせらぎ、鳥の声が響くなか、日が昇っていく様子が精妙なオーケストレーションによって表現される。ダフニスが海賊にさらわれていたクロエと再会する場面だ。

「パントマイム」は、ダフニスとクロエがパン(牧神)とシランクス(ニンフ)に扮装して無言劇を踊る、いわゆる神話を再現した場面。ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》と同様、フルートの調べがパンの吹く笛として表現されている。

「全員の踊り」は、祈りを捧げる2人の前に、娘や男たちが登場し、喜びに満ちた踊りに発展。幸福な熱狂のなかに曲を締めくくる。

(※) CMDI Events Group提供(ショール作品)

Lionel Bringuier,
Mikhail Pletnev,
and Behzod Abduraimov,
with Tokyo Philharmonic Orchestra

人のいるところには
夢がいる。

JAPAN ARTS